

## 世界陸上ロンドン大会観戦雑感

著者	谷川 聡
雑誌名	筑波大学体育系紀要
巻	41
ページ	25-28
発行年	2018-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00154987">http://hdl.handle.net/2241/00154987</a>

## 世界陸上ロンドン大会観戦雑感

谷川 聡\*

### Impressions on IAAF World Championship London 2017

TANIGAWA Satoru\*

#### 1. はじめに

通称、ロンドン世界陸上、国際陸連（以下、IAAF）World Championship London 2017 は、2017年8月4日から8月13日までの10日間、イギリスロンドンにて開催された。世界陸上は、オリンピック、サッカーW杯と並ぶ世界の三大スポーツイベントと言われおり、1983年に150以上の国と地域が参加し第一回大会が開催された。今回は、200の国と地域から約2000人の選手が参加した。はじめは4年に一度だった世界一を決める大会開催は、オリンピックの中間年に開催されていたが、1991年の東京世界陸上以降、2年に一度に変更され、オリンピックの前年と翌年におこなわれるようになった。今回は、近代陸上競技の発祥の地であるイギリスということもあり、競技場さらには街とメディアの想像以上の盛り上がりは、過去数回の世界陸上とは比較にならないものであった。男子100m決勝のチケットの売り切れだけでなく、連日1万円以上する席、8千円ほどの中間の値段の席にも多くの観客が午前・午後ともに数万人以上が押し寄せていた。



写真1 会場外の様子



写真2 会場内の様子

地元選手の応援もさることながら、トラック種目・フィールド種目に関わらず、観客の殆どが注目の選手を知っていたようだ。トラックだけでなく

フィールド種目の選手紹介への声援、スタート前の静寂とスタンドにいる観客の視点から競技運営がなされていると感じられ、選手に聞いてもとても競技しやすかったと語っていた。しかし、そのようにできるのは観客や地元メディアに競技に対するリテラシーがあることが前提である。近代陸上競技の発祥地がイギリスであり、特にイギリスで伝統的に人気のあるスポーツだということもスムーズで魅力的な運営が行われていた要因だと思われる。過去2回世界陸上をおこなった日本は、国際大会で主要国と時差が問題になり、テレビ放送優先の競技運営や時間配分の問題になる傾向があるが、まず現場でアスリートファースト大会運営を見習う点が多いと感じた。

今回世界中からの参加人数は2000人であったが、出場するには、全47種目にIAAFによって設定された参加標準記録（世界ランキング40位程度）を突破した選手で各国3名までで、さらに各種目の前回大会優勝者、前年のダイヤモンドリーグ優勝者にはIAAFから特別出場枠（ワイルドカード）が与えられていた。日本代表は41名（男子28名、女子13名）が個人種目に参加し、本学からはOBである110mHの大室秀樹（H27院修了、大塚製薬所属）、走高跳びの衛藤昂（H27院修了、AGF所属）が出場した。

#### 2. 競技結果と今後

日本は銀メダル1、銅メダル2、入賞2を獲得した（男子50km競歩銀メダル・銅メダル・5位、男子4×100mR銅メダル）。日本チームにとってメダル個数はパリ大会の4個に次ぎ、世界陸上史上2番目の多さだった。課題を残したのは、入賞数がメダルも含め5つと少なかったこと、そのうち3つは50km競歩が占めていたことだった。入賞者以外で

\* 筑波大学体育系  
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

も、男子マラソンの9位、女子1万mと男子マラソンが10位と、ベテラン3人がベストテンに入ったものの、男女マラソンの22年ぶりの入賞ゼロであり、長距離界は若手の出現が待たれる結果となった。

今回、国内外の注目を集めたのは日本の短距離チーム、4×100mリレーチームだった。男子200m7位の入賞、さらに男子100mは出場3名、男子200mで1名が準決勝に進出し好成績をおさめた。特にリレーに関しては、100m、200mの個人種目に出場していなかった2名を擁して銅メダルを獲得した。また、若手のリレーメンバーのうち大学生が2名で、さらに200m7位の18歳サニブラウンはリレーを走らなかった。また、サニブラウンは、100mで予選から向かい風の中、自己ベスト10秒05で走り、日本人初の9秒台と決勝進出が期待されたが、準決勝のスタートで大きくバランスを崩し惜しくも日本人初の決勝進出を逃した。

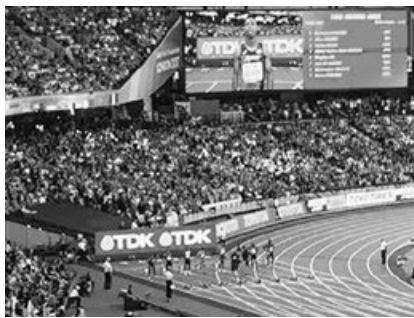


写真3 男子100m準決勝



写真4 オランダ人コーチとサニブラウン

半年間オランダ人のコーチングを受け本大会に臨んだ本人も、「本当に（決勝に）行ける気、しかしませんでした。体が綺麗に動いて、（向かい風でも）自己記録タイで走れた。決勝に行って、下手をしたらメダルまで行ける、と思っていたので、悔しい、のひと言です。」と語った。日本の陸上界では、海外を拠点として生活する選手、コーチと競技に取り組むことが珍しい中、今年度夏からアメリカのフ

ロリダ大学を拠点にスカラースリットとして生活する。世界選手権後日本人初の9秒台を出した桐生選手とともに次の世界選手権、東京2020でのファイナリストでの活躍が期待される。

このように、東京2020に向けて若くて層の厚い短距離チームが出来上がっている。しかしこのチーム、リレーのメダルの背景には、2000年以降のオリンピック、世界選手権では14回のうち12回の決勝進出を果たし、3回のメダルを獲得しているということが考えられる。これまで個人種目での決勝進出が難しく、バトンでのスピードロスの抑制を目指し合宿を重ね、現地にも科学委員を帯同させて、よりバトンの精度を高めてきた背景がある。今回も予選のデータを分析して、アンカーを交代してデータをもとにチーム全体として、どうやったら日本がメダルを取れるかを考え、メンバーを交代したことが結果につながったと選手・コーチとも語っている。個人での100m決勝進出は果たせなかったが、数人がファイナリストに近づいており、東京2020では個人種目の決勝進出とリレーでのより色の良いメダルの獲得がおおいに期待されてきている。



写真5 メダル獲得をしたメンバーのTBS番組



写真6 怪我をしたボルトの競技最後のフィニッシュ

男子4×100mRの日本チームが銅メダルを獲得した時、アンカーでウサイン・ボルト（ジャマイカ）は最後の走りを、隣のレーンで怪我というドラマティックな結末で終えた。陸上と言えばボルト、ボルトは陸上100mと、世間の誰もが知っている存在である。これまで世界陸上だけでなくボルトが出てくることで世界中が注目していた。今大会は、2008年北京オリンピックで人類初の9秒6台、そして2009年ベルリン世界陸上で9秒5台の世界記録を樹立し、ほぼ10年間、無敵の力を示してきたウサイン・ボルト（ジャマイカ）の引退試合であり、今世界陸上はボルトが主役の大会でもあった。そんな中、今回印象に残ったのは、男子100mで優勝したアメリカのジャスティン・ガトリン（アメリカ）とボルトに対する競技場の観衆、そしてイギリスメディアの対応だった。ボルトには毎回予選から賞賛の大歓声、一方表彰式の時までガトリンは登場するたびに大きなブーイングを浴びた。ドーピングによる出場停止を2度経験し、ルール上制裁措置がとけたガトリンに対し、イギリスの観衆とメディアは厳しく攻め立てた。一度ドーピングをおこなうと10年間残余効果があるという研究が2014年に発表されていること<sup>1)</sup>、長年にわたるロシア競技連盟による組織的なドーピングが行われていたこと、昨年から長距離王国ケニアのドーピング違反者の続出したことが背景にあったかもしれない。今回のガトリンへの対応をテレビなどでみた世界中のメディアや人々によって、ドーピング違反者に対する議論が世界中でおこなっていた。短距離のジャマイカ、長距離のケニアと代名詞のようにこの10年言われてきたものの、2009年以降に多くのドーピング違反者をだしたジャマイカは、ボルトの不調、若手不在もありメダル金1、銅3の4個にとどまり、前回2015年北京大会の金7銀2銅3の12個から3分の1になった。ケニア選手も多くの違反者などによる影響がみられ、ロシア選手は今大会、ロシア選手もリオオリンピックに引き続きIAAFから今大会の参加が認められていなかった。

このようなことから、この問題を解決してスポーツの価値の維持・向上をしていかなければ、今後、世界陸上・オリンピックを継続的に開催することが難しくなるという危機感をIAAFも持ち始めている。ベンジョンソン、今回のガトリンといった花形種目の男子100mでは大きく注目を浴びるため、ドーピングに対する選手の処分判断やそのためのプロセスが、今後スポーツ倫理の問題を扱う上で大切なものになるであろう。東京オリンピックは、招致時にもクリーンなオリンピックを掲げており、男

子短距離界の活躍とともにドーピング問題に対するメッセージは、そのイニシアチブをとらなくてはならないだろう。

### 3. 競技の国際化と東京2020

ここ数回の世界陸上の人気はボルト頼みところがあり、試合日程までボルトの出場種目に合わせて変更してきた。しかし、IAAF、日本の代理店を通じて放映権料は年々高騰し、現在数百億になっており、オフィシャルスポンサーの6社中5社が日本企業で、その半分以上を日本のテレビ会社が払っている状況であろう。しかし、スター選手の不在、日本との時差によって視聴者が少なくなること、さらにインターネット放送やツイッターでの映像など様々な映像媒体によって試合映像が配信されていく傾向を考えると、テレビ広告料を主とした現状のテレビ局による大きな投資は長く続かないことが考えられる。したがって、試合のメディア価値を上げることが、競技を放送する側だけでなく、IAAFなどの運営側、さらに競技をおこなう選手側からも行っていく必要があると考えられる。バスケットボール男子の新リーグ「Bリーグ」がネット放映権込みのスポンサー契約を推定で4年総額120億円おこなった。Bリーグ1部の全試合もスポンサライブで生中継される。放映権料が問題になりオリンピックもパリとロサンゼルスが同時に開催都市に決定している。今後、ネット放送の普及、放映権料のコントロールは今後世界陸上を継続していく上で大きな課題になりそうである。



写真7 オフィシャルスポンサー

また、IAAFは、2019年ドーハ世界陸上から、他の競技と同様に陸上競技のランキング制を導入する。これまで標準記録を突破することで参加資格を得ることができたのは水泳と陸上競技であった。

しかし、ランキング上位者から世界陸上の参加者を決定するようなことになると、今回が最後の標準記録突破者参加型の世界陸上であり、国内トップ選手の競技生活、国内競技会のスケジュールを大きく変化させることになりそうである。東京2020オリンピックの出場もランキング方式になる。これまで選手は、日本国内でサブトラックや競技場のサーフェイス、運営など至れり尽くせりの競技会に出場して好記録を作っていた。しかし世界陸上に参加するには、高いランキングを獲得すべく高いポイントが取れるヨーロッパの競技会（持ち記録が高くなくては出場するのも難しい）で競技を行わなくてはならなくなる。すなわち、世界大会に出場するには毎年

4～6月にかけて国内を離れてプロ的に活動していかななくてはならなくなる。多くの日本の大学と陸上競技以外の競技団体で問題になっているように、大学生として生活しながらどのようにして国際試合に出場して、オリンピック出場することができるかは大きな課題である。筑波大学でも競技力が高いスカラーアスリートを育てるには、我々の大学の制度の改革も必要となってくるかもしれない。

#### 参考文献

- 1) Jason Henderson (2014) Effects of doping could be lifelong. Athletics Weekly magazine June 19.